

昭和49年10月5日(第三種郵便物認可)
昭和60年3月8日発行ZSZ 通巻第571号
(毎月3回8の日発行)

ZSZ 心を開く

—— 自閉症治療と教育の方向を探る ——

1985
No. **13**



発行責任者 社会福祉法人 全国心身障害児財団
 理事長 太宰博邦
 〒162 東京都新宿区
 西早稲田2-2-8
 編集責任者 自閉症児・者親の会全国協議会
 会長 沢野寿夫



目 次

特集 自閉症の問題を海外から学ぶⅡ

— 心を開く13号の発刊にあたって —

13号は12号について海外からの情報を主に組みました。佐々木先生のアメリカ・ノースカロライナでの実践紹介は12号の続きです。新たに1984年久保先生をコーディネーターとして英国の自閉症協会立の施設を訪れた先生方の見学記を組みました。世界各国でこの障害にとりくんでいる多くの人たちを知ることは解明への希望をもたらしてくれる一方、障害の重大さも考えさせられます。

太田先生の表象機能障害を軸とした発達評価とその療育の指針は、こどもを一人一人どうとらえ指導するか土台になってくれるものと期待しています。

黒川先生のご寄稿は育て方の基本を実さいに即してお書き下さっているので、御両親のよい手引きになってくれるでしょう。

「何がこどもの幸せにつながるのか あなたの英知で読みとっていただきたい たいまつを掲げて進むのは あなたですから」……という発刊からの理念を今号も土台にすえて。

自閉症の発達評価と治療教育……………	2
東京大学医学部付属病院精神神経科	
太田昌孝	
永井洋子	
ノースカロライナ自閉症児療育法……………	14
TEACCHプログラムに学ぶ(2)	
神奈川県小児療育相談センター	
佐々木正美	
英国自閉症児者施設視察報告……………	25
コーディネーター	
四国学院大学 久保絃章	
* 豊かな心で育つ施設……………	26
社会福祉法人 セノ少年牧場理事長	
村田一男	
* 施設訪問の記録(1)……………	30
サマセット・コート・センター	
福岡大学医学部精神医学教室	
小林隆児	
* 施設訪問の記録(2) アングレセイ・ロッジ ……	34
名古屋大学付属病院ソーシャルワーカー	
金子寿子	
* 施設訪問の記録(3) デディンガム・スクール…	37
国立香川小児病院医師 松浦秀雄	
* 施設訪問の記録(4) シビルエルガー・スクール…	39
徳島県児童相談所 都築頌雄	
自閉症児への手立て—心の成長を考える……………	43
兵庫県立こども病院精神神経科	
黒川新二	
自閉症児者の就労実態追跡調査……………	52
東海 敬	
役員名……………	61
全国協加盟団体……………	62
編集部後記 ……	64

英国自閉症児・者施設視察報告

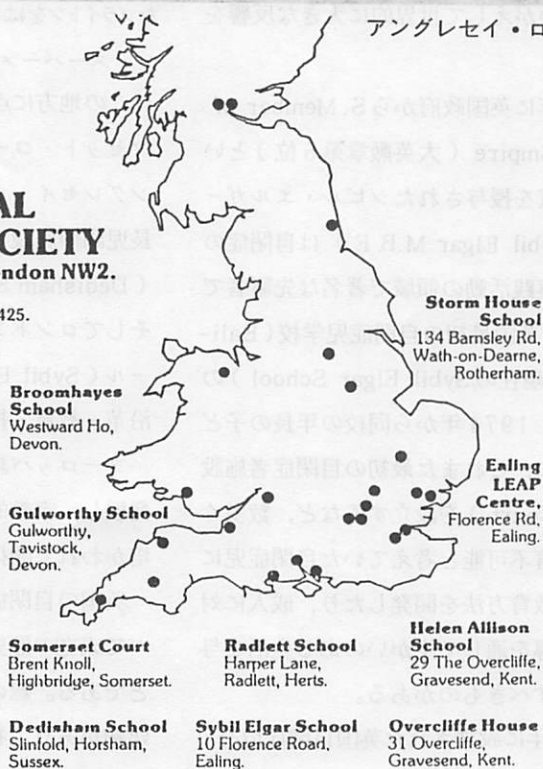
1984年6月30日～7月11日

コーディネーター・四国学院大学 久保 絃 章



**THE NATIONAL
AUTISTIC SOCIETY**
276 Willesden Lane, London NW2.
Tel. 01-451 3844.
Registered Charity Number 269425.

イングレセイ・ロッジにて



豊かな心で育つ施設

社会福祉法人・ゼノ少年牧場理事長(広島県沼隈郡沼隈町) 村田 一 男

四国学院大学教授久保絃章先生から「日本における年長自閉症児の方向性を見出しに英国に行きませんか」というお誘いをうけた。

英国自閉症研究グループ

英国は1960年代の後半から1970年代にかけて、自閉症理解の新しいうねりの中で、ロンドン大学医学部精神医学研究所ローナ・ウィング教授、マイケル・ラター教授らのロンドンのグループが、自閉症にとって基本的な障害というのは言葉であるとか、感覚とか、認知とか、それから運動であるといった障害を基礎として何らかの器質障害を予測するという立場をつらぬき、1946年にアメリカの児童精神科医レオ・カナーの遺伝的なものか、あるいは育児方法の異常、もしくはその親の性格異常からくるという学説をくつがえして世界的に大きな反響を呼んだ。

また1975年に英国政府からS. Member of the British Empire(大英勲章第5位)という栄誉ある褒賞を授与されたシビル・エルガーさん(Mrs. Sybil Elgar M.B.E)は自閉症の人々に対する実践活動の領域で著名な先駆者であり1965年、英国最初の自閉症児学校(Ealing School)(現在のSybil Elgar School)の校長となった。1974年から同校の年長の子どもたちを中心に、これまた最初の自閉症者施設(Somerset Court)を設立するなど、数多くの専門家が教育不可能と考えていた自閉症児に対する新しい教育方法を開発したり、成人に対しては作業指導を通じて生がいのある生活を与えるなど注目すべきものがある。

さらに1962年に設立された英国自閉症協会

(National Autistic Society 略称N.A.S)は英国の自閉症児者対策の中核的存在であり、その活動と行績は高く評価されている。

メンバーと日程

久保絃章教授をコーディネーターとする84年英国自閉症児・者施設視察研修旅行団が編成された。これには大学教授、講師、精神科医師、小児科医師、臨床心理家、ソーシャル・ワーカー、カウンセラー、児童相談所判定課長、施設保母、大学院生、親の会の母親、通訳など17名が参加した。

6月30日、大阪・成田空港出発、2週間の予定で初期の目的を達して7月11日帰国した。

英国の施設

ロンドンから南西500キロ、海浜リゾートで有名なブライトンをはじめバース、ソールスベリ、ウエストン・スーパーメアなどの保養地がある。私たちはこの地方に点在する英国自閉症協会経営のサマセット・コート(成人居住施設・30名)、アングレセイ・ロッジ(Anglesey Lodge)(年長児訓練施設・20名)、デディッシュム・スクール(Dedisham School)(児童居住施設・35名)そしてロンドン市内のシビル・エルガー・スクール(Sybil Elgar School)の4施設を見学し沿革・教育・指導内容について講義をうけた。

ヨーロッパ諸国の福祉施設は中世紀以後から発展し、宗教的基盤の上に立って福祉の土壌が培かれて開拓してきた長い歴史がある。

英国の自閉症児者の施設は他の福祉施設に比べて成立の歴史は浅いが、風土と土壌は同じことである。緑の木々と緑の芝生に囲まれた中に建物があり、牧歌的で詩情が溢れている。

日本のように山林を切り拓いたところ、人里離れた辺ぴなところに、どかどか建物が立ち、福祉を誇示して自然の調和と心が失なわれている施設群とは「えらい」ちがいである。

「企業は人なり」といわれるが、施設でも同じことがいえる。ただし、企業は利潤を追求して発展を図るが、福祉は人類が生存する限り永遠のものであり、特に心と体にハンディキャップを持つ人たちに「完全参加と平等」を支援するための深い福祉の心がなくてはならない。

ローナー・ウィング、シビル・エルガーリーダーは豊かな心の持主であり、今日の英国における自閉症児の福祉の発展に寄与することができたのである。

研修旅行のメンバーの1人、船岡順子（保母・広島）の研修メモは正確で詳しい。その中の総括を紹介すると、

〈サマセット・コート〉 今回の訪問で心に残ったことは、エルガー所長の強い信念と実行力、それに社会的背景の違い、国民の意識のちがいである。しかし、心にひっかかることは、エルガー所長が施設外での就職についてあまり意欲的でないのは、コミュニケーションに障害を持つこの人たちは構造化された場でないと生活できないとの信念を下敷にされているのだろうか。

〈アングレセイ・ロッジ〉 訓練を受けていた人たちは敏感である。とてもむづかしいように思えた道具、教材の中でいろんな刺激を与えている。生涯を通じて自分の仕事にする基礎がこの人の中に培われるのであろう。楽しそうに海に泳ぎに行った子どもたち、まだまだこれからの人生。明るい印象の中にも、日本もここも同じだなあと感じてしまう。

〈デディッシュム・スクール〉 人里離れた緑の中にある学校、暖かい人柄のスタッフ。子どもた

ちも自由にのびのび、子どもとのふれあいは、ここが一番たくさんできた。広場でそれぞれの思いで遊んだり、動きまわったりしている子どもたち。名前を聞くと、発音をいっしょうけんめいにおしてくれるなど、みんな自由に生き生き。恵まれたスタッフ、ゆとりのある仕事ぶり、考えていることはそんなに変わらないのに。

〈シビル・エルガー・スクール〉 町の中にあるためか、アレント校長は、周囲の状況に敏感で気をつけているようである。その中で子どもたちは、しっかりとしたプランの中で授業、訓練を受けていた。絵と花がたくさん飾られた部屋はにぎやかで、壁にはプログラムがはられて雑然とした感じであるが、嫌な感じではなく、そこに人が住んでいて、壁もその他も十分に役割りを担っているように感じられるものであった。

以上のようなものである。

ヨーロッパの福祉施設は10年前の印象によると、どの施設も入所者の障害にあった綿密なプログラムができていて、それにそって教育、訓練が行なわれている。そして分析、評価を経て発達が保障されている。

ロンドン郊外で研修した施設でも、同じことが行なわれているが、指導者（リーダー）の人柄、識見、経験、統率などによってそれぞれ施設の特徴・特色が生れてくるものである。船岡順子の施設の評価がそれを物語っている。

人と療育

英国では一番はじめは自閉症というのは、純粹に医学的な問題だというふうには考えられていたために、何年も前には病院の中に少数の専用病棟を造るということから出発したが、その後考え方が変わってきて1962年に自閉症児全国協会ができて治療的な教育に力を入れるようになった。

現在、全国協会とその地方協会が運営している学校、施設は14を数えている。形態は通園あり、居住あり、授産ありというように多様に用意されている。定員393人といわれているが、出現率10.000人に1人と推定されており、関係者はまだまだ不十分であると言っている。研修した施設から見ると、対象施設は20~30人程度の小規模であり、従事者も2人に1人の配置のようである。自閉症児者の障害の特徴から言っても、サービスはきめこまやかであることは当然のことだろう。

思うに、日本の福祉型の自閉症児施設の定員は概ね40人、職員定数4.3人に1人とされているが、これじゃ十分な療育の効果が期待できない。せめて英国並みの30人程度、職員配置は2:1にしなければならないと痛感する。

運営費についても、日本は100%措置費(民間委託費)に依存しているので、お役人が年1回指導監査の名目で法令に基いて重箱の底をつくように関係帳簿をひっくり返して調べたあと、療育については全く素人(しろうと)が講評するという滑稽(こっけい)なことがある。

英国のように現場からの報告を尊重して、その事業を援助するという姿勢が大切ではなからうか。日本における措置体系を見ると、施設は下請け業のようで、またそれに甘んじている向きがある。そこには自由な、のびのびとした空気がないように思える。またヨーロッパの施設の建物は、緑の木々、緑の芝生というすばらしい空間があって、その中に建物がある。その建物は環境にとけこんでいる普通の民家である。日本には施設を作る場合、設置基準、設備基準というものがある、部屋は1人当り3.3平方メートル、廊下、便所、台所等々にこまごまと規制し、居住人数で総ワクを決め、運動場の広さはいくら、ということが決まっている。それ

に要する資金となると、いっそうやかましくいわれる。

英国で見た施設の建物は、ごく普通の建物で、日本の基準に照らすと、すべて落第である。ロンドンのシビル・エルガースクールは市街地にある。建物はレンガ風の造りの二階建の民家である。

自閉症児協会が空家の一つを買いとって、5人の子どもを入れて療育をはじめた。ロンドンというところは、少数民族の出身者が多いといわれる。この子どもはインド、パキスタン、日系等々、国籍はさまざまである。自閉症の子どもが入って奇妙なことは、行動をするので、両隣りの人が引越した。協会は両隣2軒とも買いとって3軒を1つにして通路をつけた。1階は食堂、教室、訓練室。2階は居室といったように部屋割した。子どもも増えてにぎやかになったので、もう1軒ふやして4軒ならびになった。日本では“ここに空家があって、これを改造して施設にしますよ”と言ったら、お役人は“とんでもない、そんなものは認可になりませんよ”とことわられるのが関の山である。

近頃、ノーマライゼーションといって、障害者が地域の中で育つように大きな運動が日本でも起っている。あまりこせこせいうと「ノーマル」なことではできないと思う。英国のように行政にもおおらかさが必要ではなからうか。

自閉症協会副会長であり自閉症の娘の母親であるローナ・ウィングさんと夕食会をロンドンのホテルでもった。その話の中で、英国の協会の今のところの最大の課題は、大人の自閉症の人をどうするかということである。これは将来の課題でもある。保護された共同体やディ・センターと呼ばれる、通うことのできるセンターを多くつくることを望んでいるといわれた。まことにその通りである。

施設訪問の記録(1) サマーセット・コート・センター

福岡大学医学部精神医学教室 小林 隆 児

イギリスにおける自閉症教育の指導的立場をとっているシビル・エルガー氏を中心となってイーリング・スクールを卒業し、青年期及び成人期に達した自閉症児者の生涯教育を保証するために1974年、英国自閉症協会NAS立のイギリスの最初の年長自閉症児者の専門施設が創設された。今回の視察旅行の中でも最も期待の大きかった訪問地であったが、エルガー氏の説明と印象を筆者なりにまとめてみた。

1. センターの理念と概要

自閉症児者は他の障害児と異なった特殊なニーズを必要とする障害児(ハンディキャップをもつ人)であるため、他の障害児との共同生活は仲々困難であり、彼らの生活を保証するためには自閉症児者の専門の施設が必要である。自閉症児者は生涯全般にわたり、極め細かい生活技能の指導を必要とし、それを続けることにより大きな教育効果が期待出来る。その意味でも「統合化」という考え方に対してエルガー氏は批判的な考えを持っている。彼らの生活をより豊かにするためにも、その中で大きな位置を占める作業の内容はできるかぎり高度化し、生活の向上を目指そうとしている。こうした意味をこめてこのセンターを“Working Community”と称している。

なお、この地を選んだ理由は、エルガー氏の夫がこの近くに転勤したという現実的理由が大きく、2年間の調査の末、当時に金額で9万ポンド(約3000万円)の値段で今のセンターの土地と建物を購入した。同じ条件の建物をロンドンで購入しようとしたら20万ポンドは最低か

かるだろうとのことであった。

土地の広さは20エーカー(約2500坪)で2階建ての民家を改修し、作業場、寝室、食堂、娯楽室などを作っている。建物の周辺は豊かな緑に恵まれ、園芸作業や木工作业を行う空間と場が確保されている。センターの周辺には簡単な柵が作られている。しかし開設当初は逃亡する者がいた。そのためドアに近づいたら押え込んだりする時期もあった。しかし今ではそのような心配は無い。逃亡しようと思っても広すぎて走り疲れてしまうため、そのようなこともしなくなったのではないかとエルガー氏は冗談めかして話していた。なおこの自閉症者の中でかなり生活能力の高い14人をさらにレベルアップするために彼らのみ集めて別棟を建設し、自主管理の能力を育てるような工夫がなされている。近い将来に彼らの中の幾人かはセンターを卒業して自立した生活を行えるのではないかと期待されている。

2. 構成人員

現在の入所している自閉症児者は16歳以上で総数37名。重複障害(てんかん・盲目・難聴・半盲・身体障害など)を有するものは10人余り。障害のカテゴリーからみると、重度に障害されたもの8名、限られた能力と問題行動を持つもの13名、中等度に障害されたものが15名と、重度の自閉症児者も少なくない。スタッフは校長(シビル・エルガー氏)の他に寄宿舎勤務7名、昼間常勤8名、昼間非常勤10名の計26名が主なメンバーである。寄宿舎勤務のスタッフの役割はセンターに泊まり込み、入所者のレジャー・

タイムの管理や身辺自立の技能（セルフ・ケア・スキル）を指導することが主なもので、マニキュアやペディキュアの技術もその中に含まれている。彼らには生活技能の一つ一つを指導していかなければならず、例えば季節によって洋服を変えていくことなども含まれている。彼らの生活の安定にもつながることから、自由時間の過ごし方を大変重要視している。何故ならその過ごし方が無為になると、問題行動の発生を起しやすくなるからと力説していた。

3. 作業内容

①家内作業、②クラフト、③編物、④印刷、⑤木工などかなり各々の部署にはその道のベテランが指導にあたっている。彼らにとって望ましいスタッフ像はある一つの作業に関して専門的技能をもっている人で、決して自閉症児者の教育の専門家である必要はないという（このよ

うな人を“Green-finger”を持つ人と言うらしい）。こうした日常的な作業の他に、時折公共の施設にもつれていき、可能な限り一般人と同じ体験をさせるように工夫されている。パブにも連れていくが、彼らはアルコールを好まず、スキップというゲームをする とを好む。教会にも連れていくが、宗教の意味は分からないので礼拝を目的とせず、祭りの儀式が行われているときだけにするなど、かなりの融通性をもたせている。

一人一人に対する作業種目の決定は、まず始めすべての種目に参加させてみて、どの種目で一番安定し、リラックスしているかをみて行う。従って一日中同じ作業をする場合が少なくなく作業時間は個人の能力に合わせて幅を持たせて決定している。



木工場での作業

近所の元大工さんの小父さんが指導している。Green Finger といってスタッフの中には元技能者の活動がとりいれられている。立ってみているのはシビル エルガー先生。

4. 医学的ケア

近所の内科医や歯科医の協力を得て定期的な医学的管理を行っている。他に小児神経科医のカウンセリングも受けられるようになっている。

入所中のもので現在薬物を服用しているものはてんかんの合併を有している者が主で（抗けいれん剤6人、haloperidol 10人、抗アレルギー剤など……イギリスに多い「花粉症」のため

らしい）、就眠誘導剤は使用していないし、その必要性もないという。

問題行動の中でも特にひどい攻撃性を示す場合には、限られた期間だけ向精神薬の投与を行っている。この場合は囑託医のアドバイスを受けている。

5. 地域とのつながり

センターはこの地域にすっかり定着し、例え

ば印刷作業では地域からの注文を受けて行われ、その他の作業で作られた製品（園芸作物、種、苗、織物、木工製品など）は日常的に販売され、他に定期的なバザールで販売されたりしてその収益金はセンターの運営資金として活用されている。

年に1回は地域住民が中心になって資金集めが行われたり、センターの行事には地域住民は必ず駆けつけて参加してくれるという。

6. 予 算

政府から年間1人当たり6600ポンド（約200万円）の補助を受けており、これを主にスタッフの件費や建築費（改修工事など）に当てている。当センターで作った製品の収益金はみんなの遊興費や活動資金に当てることで生活に潤いをもたせている。毎年寄附金が多く集まり、地域住民の手による資金集めも手伝ってかなり安定した運営が行われているようである。

7. そ の 他

エルガー氏を囲んで質疑応答を行ったので、その中からいくつかの興味ある点を述べてみたい。



＜問題行動に対する基本的態度＞

問題行動を制御するためのあるシステムをつくるのが大切である。例えばその行動をしたら本人にとって利益になるものと失うことをわからせるようにきちんとあらかじめ決めておくことで、その行動がみられたら必ずそうするように制度化することが大切であろう。

加齢に伴って原因ははっきりせず、半ば自然に攻撃性が出現する場合がある。人をたたく行為は理由がどうであれ悪いことをわからせなくてはならず、そのためには因果をはっきり分らせるため、直接かつ即座に対応することが重要で、問題行動が出現したら、例えば食事やおやつを食べている時であれば、食べ物を即座に取るなどのはっきりした対応が必要である。かんしゃくがひどい場合は、センターが広いので外に出してしばらく歩き回らせるなど好きなようにさせておくと自然にかんしゃくは治まることが多いという。

気を付けなくてはいけないのは、スタッフがひきおこす問題行動がある。特に彼らに余りにも干渉しすぎて過度な話かけを行ったり、ゲー

農場で

重度の障害のある子は農場でのんびり働いていた。

ここの作物は施設の食用に供するということだ。

ムを長時間やりすぎたり、乱暴な遊びを強いたりすると、彼らに攻撃性を引き起こし易くなる。

薬物療法を行うことは可能な限り少なくして

おり、薬物を積極的に使用する場合は、有る問題行動のパターンを崩そうと思った時で、そのような固執した行動を無くすことが出来たらす

ぐに囑託医の許可を得て服薬を中止するように心がけている。

＜コミュニケーションの障害に対する工夫＞

自閉症者の中でも特に重複障害（視力・聴力など）をもつ者や重度の精神遅滞を合併している者ではサイン・ランゲージを教えることも極めて困難である。そのためごく簡単な身振りを学習させるように工夫している。例えばトイレに行きたいときにはズボンのボタンに手をやり、食事をもっと食べたい時には皿を持ち上げるなどの意思表示が出来るようにしている。

7. おわりに

この視察旅行の計画を知った時、私は丁度90名年長自閉症の追跡調査を行っている最中であった。きわめてタイミングよくこうした計画を知らされたため、早速希望した。久保先生のコーディネーターということも大きな魅力であった。参加者は当初の予定数を下回ったことはかえって幸いし、細かく行き届いた配慮のあるツアーとなった。

今回の最大の目的地のサマーコートセンターは2日間ゆっくり見学できたが、英国の代表的な施設とあってさすがに立派な内容をもった施設であった。こうした環境におかれたら、彼らもさぞ伸び伸び出来るだろうと思ったが、ここ

の自閉症者達の姿は意外に正気に乏しく、黙々と動いているのが印象的であった。他の施設の自閉症児の印象とは随分異なっていた。これは年長自閉症の一つの特徴であることは確かであろうが、自閉症のみを集めた施設の是非を考えさせられた。エルガー氏は「統合療育」には大変批判的で、こうした専門施設の必要性を強調されていた。そのためもあってか、彼らを地域の中に出して就労させることにはあまり積極的でない印象を受けた。恐らくその背景には英国の深刻な不景気が関与しているようだが、筆者は最近の研究の中で自閉症者も「健常者」と同じように他者の中で生活し働くことでもって生きる喜びを感じ、生き甲斐をもつことがわかってきた。やはり可能な限りコミュニティ・ケアを追求していく姿勢は失わないようにここがけていかねばと思われる。

ともあれ、エルガー氏の若々しさとひたむきな情熱と自信に満ちあふれる姿を肌と感じ取ることができ、私自身の自閉症研究へのやる気をより一層強固なものにしてくれたことが、今回の視察旅行の最大の収穫であった。久保先生をはじめ、通訳の安田さん、さらに最後までわがままな私を拒否せず付き合って下さいました同行の皆さんに厚く御礼を申し上げます。



芝生の庭からみた本館

広大な敷地の中200年前の建物をそのまま使っている。
これが本館で、作業場等が点在している。

施設訪問の記録(2) アングレセイ・ロッジ

名古屋大学付属病院ソーシャルワーカー

金子 寿子

アングレセイ・ロッジは、ハンプシャー州にある。7月4日の一時頃、バスの運転手のテリーさんは珍しく、吾々の目ざす施設をさがして歩き、一行は予定時刻より少し遅れて到着した。既に庭先には、小型のバスの中にこの施設の若者等の顔が見える。彼等はこれから外出し、ダンスや乗馬などをするという。この施設には、2台の小型バスがあり、まだ1台分は払い終わっていないのだという。

アングレセイ・ロッジには16歳から19歳までの自閉症児者、男性13人、女性7人、計20人が入居している。モーリスさんは校長先生、その夫のカーリーさんは居住管理者である。サマセットコートのエルガーさんよりずっと若いカップルである。夫妻に「まず外を見て回しましょう」と案内される。この日はよく晴れて陽光が強い。大きい一本の松の木陰を求めて夫妻を中心に輪になった。安田さんのスムーズな通訳によってカーリーさんの説明を聞く。「その丸太を組んだ大きいジャングルジムは、慈善団体の人々の奉仕によって作られたものです。」と言われた。

アングレセイ・ロッジの入居者の選択基準は主にハンプシャー州の人に限られる。入居の条件は毎週、金・土曜日に家に連れて帰り、又正月にも連れて戻れる家庭の者であり、攻撃性の強い子や遠方地の者はどうしても後回しにされるらしい。更に、この施設にいた後に、その後何処に入所できるかというライフケアも考えて入居者を選んでいるとのことであった。

16歳から19歳迄の入居者の経費は教育当局が

支払い、19歳以降の一生涯の費用は社会サービス部でみる。一生の面倒をみるかどうかについてはその部の役人によって決められるのだという。

もう一度入居条件を箇条書きにしてみよう。

- ①自閉症と診断した精神科医の手紙が必要である。
- ②土曜・日曜に家に連れて帰れること。
- ③入居者についてのアンケート調査を前の学校、精神科医、ソーシャルワーカー等より貰うこと。
- ④最後に校長のモーリス先生と臨床心理学者が面接の上、決定する、等。

アングレセイ・ロッジの職員は教師2人(モーリス先生ともう1人)、工芸の指導者1人(ジョンソンさんという男性)、看護婦1人、居住サービススタッフ1人(カーリーさん即ち校長先生の夫)、ケアオフィサー1人(身辺自立を教えたり料理、庭の手入れ等をする人)。

職員は自宅より通勤し、勤務時間は朝7時より午後3時半とし、遅番の12時より午後9時半迄の2組に別れる。入手の多い時間帯の午後を外出しているレクリエーション等に当てている。

工芸は午前9時半から11時迄で、生徒の能力に応じたものをさせる。基本訓練として此処に来る前に、もっと手の協応運動として工芸技術(織物、編物、木工等)を教えておいて欲しかったと思っているとのこと。

指導は、入居者の状態・程度によってA、B、Cのグループに分けられている(Aグループは軽くて9人、Bグループは中位、CグループはIQの程度の低いもの)。A、Bグループは週4日、教室で勉強か工芸をする。Cグループは

1日だけ教室で勉強し、他の日は身辺自立などのために家事、料理等の手伝いをする。これ等は看護婦によって指導されているという。

入居者の衝動行動（パニック）の時には、どのような処置がなされているのかという質問に対してモーリス先生は「外を走り回らせることや、痙攣発作時に投薬の必要な者には看護婦より薬が与えられ、重積発作時には医師を電話で呼ぶ。」

又、薬物療法をどのようにしているのかという質問に対しては「出来る限り使いたくない。ここは良い環境だから、と薬を止めさせるようにし、鎮静剤は用いていない」ということであった。

マスターベーションについては、どのように指導しているかという問いに対しては「日中は手を使う作業活動を奨める。夜は自由にさせている。人生にとって性行為は、自然の発散であるから。」という答えであった。

この土地を選択したことについて何うと「自閉症協会の6歳から15歳までの学校がサザンプトンとゴスポートが資金を集めてこのアンブレセイ・ロッジをつくった。そして、ハンブシャーの地方協会が1978年5月にモーリスさんを校長として雇い、同年8月にカーリーさんを雇った。この家は元はナショナルチルドレンハウスと言って、家庭に問題のある子どもが減少し、空き家となっていたもの」という。アンブレセイ・ロッジも又外国でよくみうけるような白壁の瀟洒な建物であった。

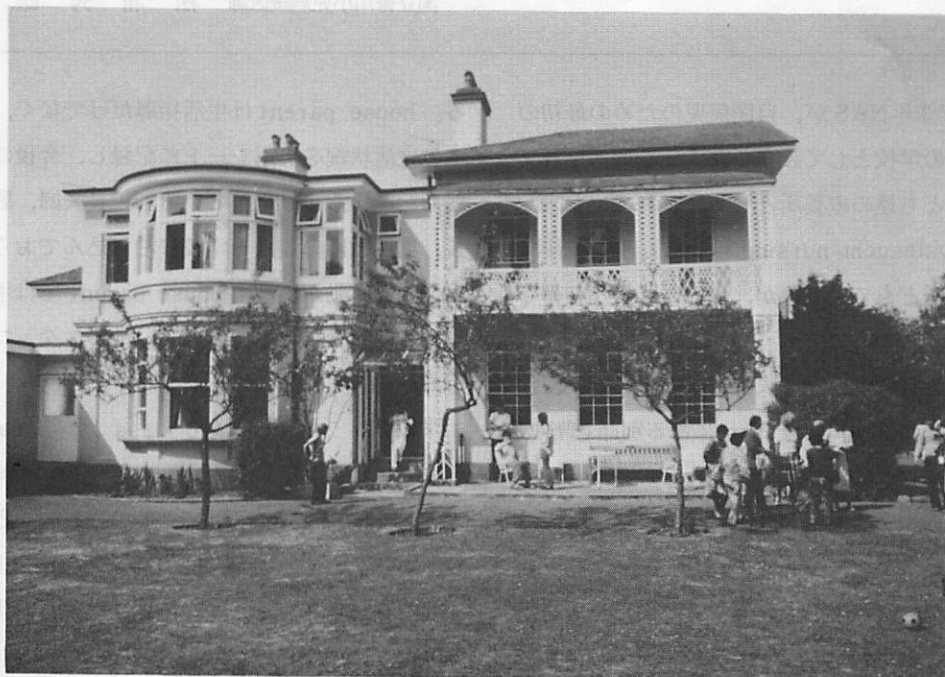
ロンドンのあるレストランで、ローナ・ウィング先生と会食をした時に、全員が一言ずつ感想を述べた。私はその時に「イギリスの自閉症児もほんとに同じだと思った!!」と言うと、ウィング先生は「私も長崎でそのように思いました」とおっしゃった。私は手指を口にくわえ、飛び

はねながら高い声をあげて走ってゆく子どもの姿に、日本にいるカッチャンの青年時代をダブらせていた。

アンブレセイ・ロッジの廊下の壁には、誰の手になるのか稚拙だけ減ども魅力的な顔の絵が貼ってあった。顔の表情に添えて「泣く」「笑う」等の文字の表示がある。或る部屋の壁には人の祈っている絵姿があり、そこには「祈り」と書かれてあった。文字と動作の意味関連が示されていた。いってみれば手話である。同行の1人のYさんは「手話を教えると、子どもは言葉を覚えようとししないのではないか?」という質問を投げかけた。私はとうとう青年になった今日まで言葉を発しなかったK君の幼児期のことを、K君の母親とアメリカの文献をたどたどしく読み、どのようにしてことばを出させようかと努力した日々があったことを思い出していた。もしもっと早期にこの手話法を教えていたとしたならば、今日、K君はどのように発達したであろうかと。しかし、無理をしても覚えさせることも出来なかったであろうし、現在、彼は「ことば」は出来なくても一人で地下鉄に乗り作業所に通っている。Yさんの投げかけたこの疑問は、誰が一人の子どもに二通りの実験をなし得ようか。一人の人は2回生きることが出来ない。他のスクールにも手話法の絵が見られたが、この傾向は、アメリカより伝わってきて4～5年来のことであるという。

今回の旅行で印象深いことは数え切れない程あった。どこのスクールのできごとであったろうか。訪問した我々一行の一人ひとりに握手を求める少女がいた。その少女は私の手を握ったその瞬間に「リトルハンド」とささやくような小さい声でいった。私の胸中には、「小さい手」という翻訳語が感動をもってさざ波のように広がった。「そうか、小さい手なのか」と、私は

自分の手のひらを一杯にひろげてしげしげと見た。「リトルハンド」というあの時の音声が、時々、何かのひょうしに思い出されてくる。このことは、はるかにはるかに私より小さいイギリスの少女からの手のひらの贈物である。



アングレセイ・ロッジ
普通の住宅をそのまま使用



手作業を主に指導
ここでの指導が成人施設で生かされるようにとのこと。

施設訪問の記録(3) デイシャム・スクール

国立香川小児病院医師 松浦秀雄

1970年NASが、自閉症児のための最初の全寮性の学校として設立した。そこは、それまでは子ども達の療養所として使われていた (convalescent nursing home)。開校時は、5人の子どもであったが、現在は35人が在籍している。

学校の寮には女子7人、男子21人の計28人が入っている。他にHorshamにある別館(普通の民家)に14~19歳の7人が住んでいて通学している。この子ども達は能力的には高い子である。この家は3階建てで、1階が食堂、居間などの共用部分、2階が女子とスタッフの部屋、3階が男子の部屋になっている。スタッフは4人で常時2人が放課後や休日の世話や指導をしている。

学校の寮では5人の子どもで1グループを作り、グループで行動するようにしている。5人は5本の指に例えられる。母指はモニターといわれ、スタッフの伝言を他の子ども達に伝える役割をしている。先生の所へ話しに行きなさいとか、テーブルを片付けなさいとかの指示をする。示指は母指の弟子でモニターの指示で行動する。中指はあまり行動的でないあたりさわりのない安全な子である。環指と小指に相当する子は問題行動があったり、能力的に低かったりする子である。各グループとも上記のバランスを保つようにしている。問題行動のある子が3人になると、グループとしてうまくやっていくことは難しい。

1つのグループに1人のhouse parentがつくようにしている。12人のhouse parentがい

る。house parentは生活指導だけでなく、寮での生活状況を専用シートに記録し、今後の課題も記載するようにしている。校長夫婦、副校長、男性教師の4人も学校に泊り込んでおり、寮で問題行動があってhouse parentでは手におえない場合に呼び出される。他のスタッフは近郊から通ってきている。

学校のクラスは5つありclass 1からclass 5までにわかれている(別図参照)。class 1はspecial opportunityで重度の遅れの子も達があり、きちんとした教科学習、課題を遂行することは難しく、playが中心となる。現在6人の子どもがいる。class 2とclass 3は中間的で14歳までの子ども達が入っている。新入生はclass 1に入るかあるいはclass 2か、class 3に入る。class 4とclass 5は14歳から18歳までの子ども達が入り、class 5の方がclass 4より高度である。class 4とclass 5の子ども達は教科学習以外に実用的な技術とか作業技術とかの学習もする。又各クラスとも、週1回家事などを習う時間がある。さらに言語評価と訓練もうける。18歳を過ぎて卒業するとadult training centerとか、residential communityとかに行く。

教室は普通の教室形態で、読み書きとか算数の勉強をする。又、学習態度をきちんと整えていくことも大切にしている。1クラス生徒は大体7人で、1人の教師と1人のアシスタントがつく。言語に関してはspeech therapistがおり、音楽療法のためのmusic therapistもいる。

教育の目的は、社会的に受け入れられるよう

になることと、独立性を得ることである。

新入生があると、行動観察してリストにチェックしていく。1年毎にこれを継続していく。チェックリストは2部からなり、前半は普通の子との比較、後半は自閉症の症状(点が高いとより自閉症的となる)をチェックする。各領域とも0～5点の段階があり、集計・処理はコンピュータを使っている。各領域の点数を出し、この学校で修了すべき範囲のものと比較して足りない所を補なっていくようにする。チェックは毎年おこなっているが、変化がないということも重要な情報となる。

言語評価では、ダービッシャ言語尺度を使う。情報語レベルを測定するが、5つの情報語が最高となる。

sign language (以下S.Lと略)はMakaton S.Lを使っている。これはイギリスで標準的に使われているS.Lで、NASの学校はこれを使っている。第1段階が18カ月のレベルで、6カ月ごとに各段階へあがっている。S.Lが有用なのは能力的に高い子どもである。言葉をしゃべっても有意であるとかコミュニケーションに使えるとかは難しい。何らかの形でコミュニケーションできるようにしたいので、S.Lと言葉の両方を使って言葉を理解させ、コミュニケーションに使えるようにしていく。S.Lで読み書きができるようになった生徒が1人いる。



スタッフは殆んど自閉症のことは知らずにここに来るが、知恵遅れの子とも接した経験はもっていることが多い。新しいスタッフがくると、説明書を読みもらい、教師としての心構え、哲学、普通の子どもの成長発達過程、自閉症のこと、問題行動への対応方法などを教える。常々、スタッフの間でミーティングをもち何か問題があれば皆で話しあって解決していくようにしている。問題をかかえたまま放っておくと、それが他の子ども達へも影響していつてしまうからである。又、新しいテスト用具などを購入した、それを使えるようにトレーニングをうけにいくようにしている。

入学時、三通の書類を提出してもらっている。一つは医師の診断書、一つは教育心理学者の診断書、もう一つは親へのアンケートで、これが最も重要である。食物の好き嫌いとか、睡眠状況とか、身の周りのことの自立状態とかを問うようになっている。

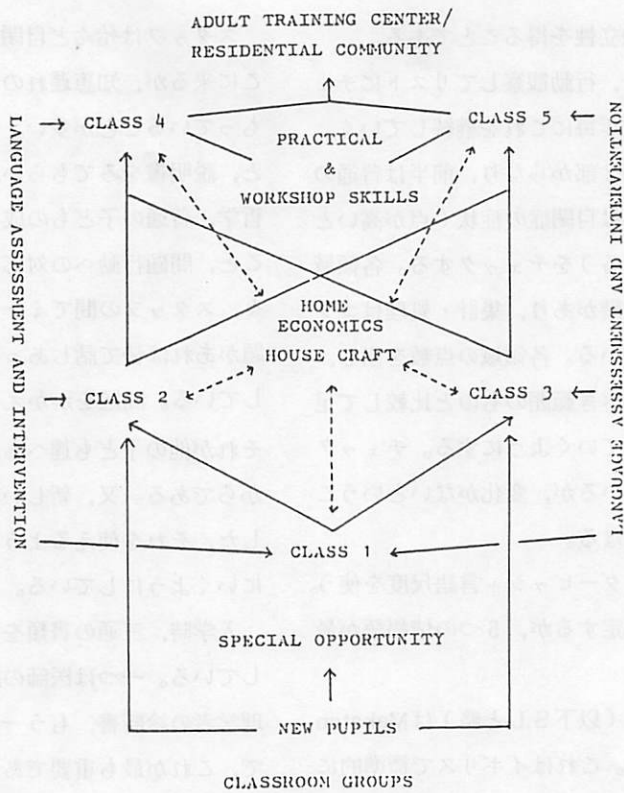
週1回学校医が訪問してくれて身体的な診察をしてくれる。又3、4週に1回精神科医も訪問してくれる。投薬はてんかんの7人への抗てんかん剤が主であるが、2人の子どもには鎮静剤を投与しており、現在徐々に減量しつつあるところである。できるだけ薬剤は使わないようにしている。

家事の実習

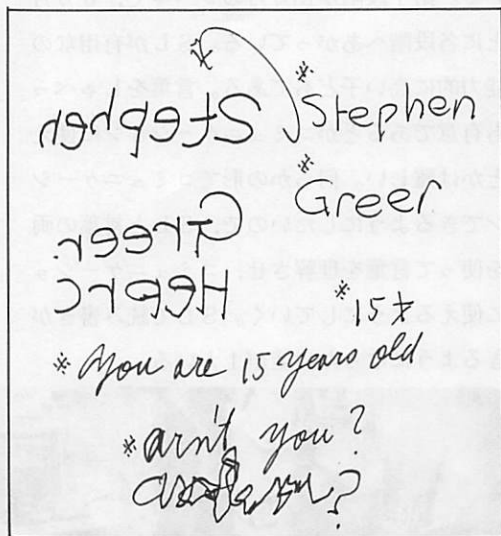
生徒が一人ずつ当番になり先生と一しょにティータイムのお菓子作り。

テーブルセットも同時に学ぶ。

ソースをなめさせてもらったりしてたのしそう。



写真はステファン 15才



昼食後、こどもたちのあそんでいる中庭でメンバーは思い思いに自閉児たちの相手をしました。What is your name? と問いかけるとだまってただ私のノートをみている少年に、ペンとノートを渡しますと写真のように字を書িয়েくれました。全く逆さ文字なのにびっくりしました。彼はステファン・グリアーというのでした。先生は「彼はことばのない子だ」といいましたが…… しばらく字でコミュニケーションをしたのです。 (Y. Y)

施設訪問の記録(4) シビルエルガー・スクール

徳島県児童相談所 都 築 頭 雄

The Sybil Elgar School, named after its pioneering founder, was the first residential school, established in Ealing, by the then fledgling National Autistic Society.

シビル・エルガー・スクールは、全国自閉症協会(N.A.S)立の学校の中の一つであり、イギリスで自閉症児のために創立された最も古い学校である。

イギリスにおける自閉症児教育は1961年、エルガー先生が自宅で自閉症児のための学校を開いたのに始まる。その頃は、イギリスにおいても、自閉症児は教育を受ける場所がなかった。1962年に数人の親がBBC放送で実状を訴えたところ、似たような問題をもっている52人の親が集まり、N.S.A.C(1982年10月にN.A.Cと名称変更)が結成され、運動が始められた。立法府に働きかけたが、自閉症の原因についてさまざまな憶測が流れていたために、何もまともな対策は出てこなかったとのことである。そこで、自分たちで学校をつくることになり、資金集めをして1965年にイーリング・スクールが創設された。そして翌年、教育当局より正式に学校として認められた。これがシビル・エルガー・スクールの前身である。学校設立並びに校長として自閉症児教育に非常に功績のあったエルガー先生の名前に因んで1974年、エルガー先生がサマーセット・コート(成人施設)へ移られたときに、シビル・エルガー・スクールと改名されたのである。

設立当初は、教育の効果があることを証明する(関係者に認識させる)ことが学校設立の目

的の一つでもあった。8人の生徒でスタートし、教育による変化(進歩)が教師、心理学者によってまとめられ、それをもとにして教育当局に働きかけ、正式に学校として認可させることができたのである。

当時、イーリング・スクールに似たものはあちこちにできたが、あまり効果を上げることができなかったとのことである。その理由は「自閉症を発達障害とみて指導法を構造化すること」を怠ったためだとのことである。

また、創立当初はいろいろな苦労があったようである。最初は一軒の民家を買とり、8人の生徒でスタートした。ところが近所の人たちには嫌がられ、その隣の家が引越していき、また隣が引越していくといった具合で、結局、現在では4軒の民家を買とり、それらをつなぎ合わせ、内部の構造はほとんどそのまま、学校として使用している。近隣の人たちの理解を得るためにクリスマス会等に招待したり、いろいろ努力はしてきたが、現在でもやはり「街中にあるのは好ましくない」と思われているとのことである。

1. 建物及び設備

建物は写真のように全くの一般住宅を買ったものであり、4軒のうち3軒を学校として使用している。本館を中心にして左右に並んでいる。内部には教室が6つとスピーチ・セラピ

一室、ミュージック・セラピー室、図書室、台所、食堂、寄宿寮、温水プール等があり、外は4軒の庭をつないだプレイ・グラウンドになっている。



一般住宅をほとんどそのまま使用しているため、空間的には非常に狭く、学校・施設という感じは全くしない。むしろ、家庭的な雰囲気が強く、身辺自立訓練から家庭生活、社会生活に必要な諸々のことを学習していくことが必要な自閉症児の教育には多くの利点があるように思われる。

また、課題目的別に多くの部屋をもっていることも非常に重要なことであると考えられる。

2. 生徒数及びスタッフ

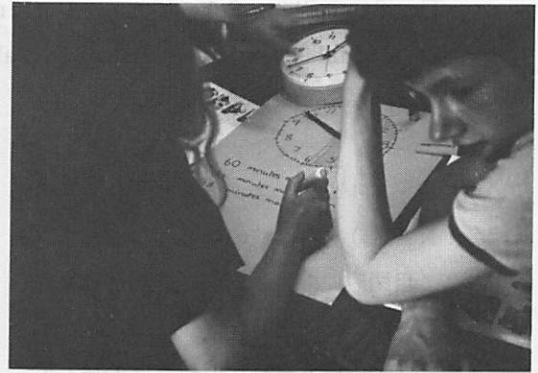
生徒は自閉症児のみであり、全部で40名である。この中には、卒業しているが行き先がないために残っているものが一部含まれている。年齢は5歳から19歳までである。19歳までは、教育当局から必要経費が支払われるが、19歳を過ぎると出ていかなければならない。

1クラス6名の生徒であり、1人の先生と1人のアシスタントが配置され、生徒数対スタッフの割合は3:1となっている。将来は2:1(1クラス4人を2人でみる)までもっていきたいと考えているとのことであった。

また、その他に専門スタッフとしてミュージック・セラピスト、スピーチ・セラピスト、ア

ート・スタッフ、ムーブメント・スタッフがそれぞれ1名ずつ週2日働いている。

障害児教育を行なっていく場合、複数担任制は必要不可欠であると、日頃痛感しているところであり、大変うらやましいと思った。



3. 教育目的

シビル・エルガー・スクールの目的とするところは、自閉症児が成人した後、生活や仕事が十分できるように、子供たちを訓練(教育)することにある。

したがって、あらゆる領域で社会的に必要とされるものを満足なレベルまでもっていくことが重点目標とされている。ハンディキャップをできるだけ少なくし、困難をのりこえていく道を発見し、可能性を最大限にのばし、可能なかぎり一般社会に統合できるよう彼等を援助するために、小さな寄宿学校の構造化された環境の中で、自閉症児に特徴的なあらゆる身体的・社会的・教育的問題にとりくみがなされている。

4. カリキュラム

シビル・エルガー・スクールの教育活動は、言語発達、数の操作、生物、自然、芸術、手芸、ドラマ、音楽、タイプライティング、大工仕事等多くの領域にわたっている。そして社会生活能力、家庭生活の全て、身辺自立、服装、健康

等が重視されている。また作業技術のプログラムは学卒者の経験を拡げたり、彼等の自活を養う手段とされるものである。

また、他の活動としては、週末の公的なスイミング・プールの利用、町の図書館の利用、アドベンチャー・プレイ・ランドでの活動、学校のミニバスや公の交通機関を利用して買物や音楽会、劇場、映画館などへ出かけること等がある。

自閉症児のみの学校であるというから、カリキュラムが1人1人に合ったものが作られ、個別指導が十分なされている。全体としてのカリキュラムは、年少組は言語、認知、感覚統合、身辺自立訓練などに重点がおかれ10歳頃からアカデミックな教科学習をとり入れ、年長になると、作業や実際の社会生活に必要なルールを身につけることに重点がおかれている。そして具体的には個々の生徒の発達段階に応じて個別的なカリキュラムも組まれている。

最終の目的は、社会生活を送っていけるようにとのことであり、そのために必要とされるいろいろなスキルを身につけることが目標とされ、活動内容がバラエティに富んでいる。料理実習（ケーキ作り他）などでも当番制で実施しているのは印象的であった。

5. 居住施設

4軒目の建物は2、3年前に購入したものであるが、ここには8人の年長の子供たちが住んでいる。（うち3人 年少児であり、週末には自宅に帰る。）

また、地階にはリープの家があり、12人の学卒者が生活していた。社会復帰をめざした軽度の人たちの居住施設である。

6. その他

シビル・エルガー・スクールは、しつけがきびしいといわれているが、この点についてアレ

ント校長先生からつぎのような説明があった。

「Physical restraint（身体拘束）として、椅子に縛る、手をおさえつける、手をうしろにおさえつける等の方法をとる。椅子に縛るのは足をゆるく縛るので、子供はいつでもはずせる。また自傷のある子供は手をおさえつける。そのうちHands downということばだけの指示でよくようになる。攻撃性のある子供は、5分間、手をうしろにおさえつける。ぬけだそうすると痛いくらいにおさえつける」とのことであった。

また、出入口はすべて施錠されていた。これは、住宅街の真中にあることから、近隣に対する迷惑、無断外出による混乱、時間のロス等をさけるためにやむをえないことかもしれないが、他の広い敷地をもっている学校であれば、この点は随分ちがっており、何かわりきれない気持ちでした。

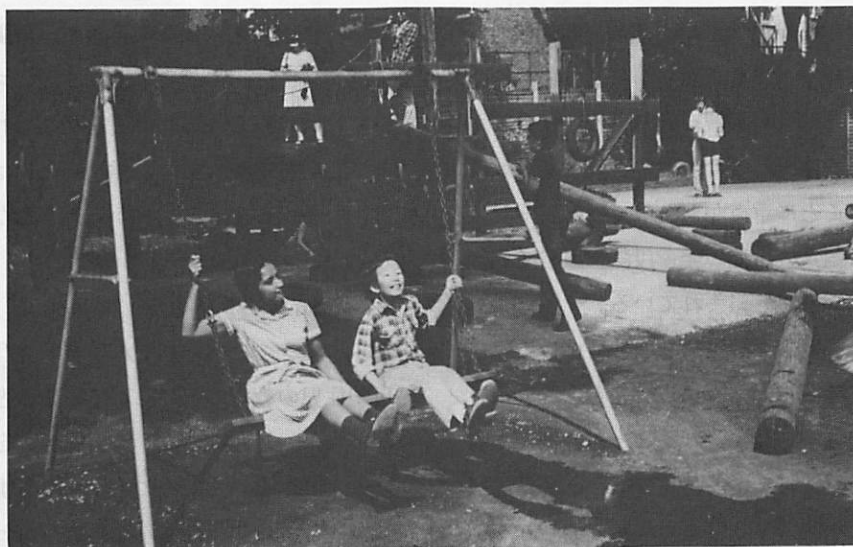
特に印象的だったこと

第1にスタッフがそれぞれ誇りと信念をもって自閉症児の教育にとりくんでいることに感心させられた。わが国では、障害児教育を専攻している人がたくさんいるにもかかわらず、障害児教育に対する関心のありなしにかかわらず、障害児学級の担任が交替制になっていることを思い、うらやましいかぎりであった。

第2に、自閉症児問題に対して非常に現実的なとりくみがなされていることである。最終的には、統合をめざしながらも現段階では、統合教育の効果に否定的な立場をとり、その前提条件としての社会生活に必要なスキルを身につけることを目標として自閉症児教育が行なわれている。統合教育の是非はともかくとしてわが国でよく抽象的に統合ということばが使われるが、具体的な方法論なしに統合ということばを使うことの無意味さを痛感させられた。

最後に、ウィング先生との夕食会の席で、感情の問題について質問したところ、現在の段階では、共感性といったことは望めないことであるとお話があった。これは自閉症児(者)が社会生活を営んでいく上で最も障害となっている問題であり、今後の研究に期待したいところである。しかし、現場では想像性、共感性といった問題に対してこれといった解決策が見出せないにもかかわらず、希望をもっていろいろな

試みがなされている。シビル・エルガー・スクールでも、ミュージック・セラピーやアドベンチャー・プログラムその他の活動をとおして協調性、想像性をひきだすためにいろいろなとりくみがなされている。プレイ・グランドでは、規格品の遊具をさけ、素材を並べておき、できるだけ想像性を働かせ、自由に遊べるように工夫されている。



休み時間の遊び

写真の2人乗りのブランコは、協力関係の中から協調性を養っていくための夢を託しているかのようであった。